

【ミッションステートメント】「いっしょに歩こう！プロジェクト」～日本聖公会東日本大震災被災者支援

- ① わたしたちは、東日本大震災により困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます。
- ② わたしたちは、被災地の方々の生活と地域の再創造に向けていっしょに歩きます。
- ③ わたしたちは、主イエス・キリストが、共に歩いてくださることに励まされていっしょに歩きます。

もうすぐ3月。あの震災より1年が経とうとしています。もう1年なのかまだ1年なのか、それでもわたしたちはいっしょに歩き続けようと思っています。これからもみなさんの温かい支援をお寄せください。

【第2次釜石青年ボランティア】

2月6日(月)～11日(土)の日程で、第2次釜石青年ボランティアが派遣されました。今回参加したのは、齋藤晃さん(旭川)・高橋愛さん(小樽)・大町包さん(マーガレット)・鈴木照洋さん(札キ)の4名。吉野執事の引率のもと、今回は、往きは仙台経由で東北入りし、いっしょに歩こうプロジェクトの仙台オフィスを訪問。中村淳司祭・岸本望司祭の案内で、石巻の大指漁港を訪ねました。陸前高田より南の被災地を訪れたことのなかった彼らは、様々な困難な状況に触れ、様々なことを考えたようです。釜石に到着後は、仮設住宅前の通路の氷割りや、仮設住宅の訪問、談話室での足湯サロンなどを行い、神愛幼児学園で子どもたちと触れ合い、多くのことを経験してきました。3月末には第3次の青年ボランティアも企画されています。どうぞ、これからも青年たちの活動を応援してください。今回の参加者の中より、小樽聖公会の高橋愛さんに感想をいただきましたので掲載いたします。

釜石での活動を通して

小樽聖公会 クララ 高橋

愛

私は、2月6日～11日まで行われた釜石での青年ボランティアに参加させていただきました。この活動を通して私が強く感じたことは、プロジェクト名にもある「いっしょに歩く」ということです。震災が起こった日、私は家でずっと津波の様子や震災被害の状況をニュースで見っていました。あれから約11ヶ月。震災後はじめて訪れた東北のまちは、あの震災直後テレビでみていた風景から状況はほとんど変わっていませんでした。そして、自分の目でみた被災地の様子は、新聞やテレビなど報道では伝えられていない、私の想像を超える状況がひろがっており、なにも言葉ができませんでした。

次の日、私は仮設住宅で雪かきのボランティアを行いました。私は、被災地の状況を見てから仮設住宅に着くまで、仮設で暮らしている方々とどんなお話をしたらよいのかずっと考えていました。しかし、雪かきを開始してから、その不安はなくなりました。なぜなら、休憩時間や雪かきの作業のなかで、自然と普通にお話できる雰囲気になっていたからです。また、休憩時間には、自治会の方々から飲み物やお菓子などたくさん差し入れをいただきました。このとき私は、わたしたちもボランティア活動中、自治会の方や雪かきをいっしょにさせていただいた方に支えられているということを改めて感じました。わたしは、このことも、被災者の方と「いっしょに歩く」ということなのではないかと考えます。次回の青年ボランティアにも参加してもっと釜石の方々とお話したり、いっしょになにかできればと思います。

【広谷司祭派遣、そして東京教区との協働スタート】

冬の間、なかなか長期滞在の教役者を派遣することができずに、心苦しく思っておりました。また、他教区からの派遣もお願いしておりましたが、なかなか具体化できず、釜石支援センターに負担をかけておりましたが、3月からは東京教区との協働が始まり、3月15日(木)～24日(土)の期間は、東京聖三一教会から高橋頭司祭が、3月23日(金)～4月3日(火)の期間は、阿佐谷聖公会聖ペテロ教会の田光信幸司祭が、それぞれ派遣されることになっています。また、北海道教区からは3月8日(水)～17日(土)の日程で聖公会神学院校長の広谷和文司祭が釜石に派遣されることになっています。東京教区は今後もコンスタントに司祭を派遣してくださることになっており、東北教区のイ・チャンヒ司祭と合わせ、釜石でのチャプレンシーを担ってくださることになっています。釜石での教役者の働きのため、お祈りください。

【釜石での活動】

支援室ブログ(海老原祐治さん・向井清子さん発信)より抜粋

2月10日

本日は足湯&お茶っこサロンの日。また吉野先生率いる青年キャンプの最終日。青年たちにも足湯を体験してもらいました。やや緊張しながら仮設に向かう道中もレッスンを繰り返す青年たち。さぞ緊張したことでしょう。でもおばちゃんたちには大好評だった様子。高校生は大人気だったようです。ご苦労さま。また来てね。今回の青年ボラキャンでは半年ぶりに会う青年もいました。彼らの成長ぶりには目を見張ります。若いっていいですね。(私もまだ若い)この半年間で自分がどれだけ成長したのか疑問です。彼ら

ほどではないけれど、私もそれなりに成長したのではないのでしょうか。被災地で支援者を育てるのは被災者です。その意味においては、釜石にはよい教育者が大勢います。きっと私も成長しているのです。自分ではよくわかりませんが。

2月14日

本日で香蘭女学校の生徒も三日目。だいぶ名前と顔が一致するようになってきました。その迫力にも馴れ、また彼女たちも被災地に馴染んできました。ふりかえりなどで話しを聞いていると、ほんとに素晴らしい感性で被災地をまたは被災者を消化していることがうかがわれます。人とひとの関わりについて、生きるということについて、みなさん涙をながしながら語りました。また李先生のお説教がいままで聞いたどのお説教より心に届いたと涙ながらに話した方もいました。みなさんいい体験をされました。そのお手伝いできて光栄です。

今日も昨日のように午前と午後の入れ替え制でワークを行いました。写真洗浄のチームと仮設訪問のチームに分かれました。午前には向井さん引率で甲子 C と甲子 D で湯たんぼの配付。それに五名。そのほかは私と写真洗浄。今日も様々な交流が行われました。互いにお会いできたことを喜びあえる関係、それが今日もたくさん展開されました。我らのセンターでもっとも大切にしていることです。

2月20日

本日は上中島仮設での足湯&お茶っこ&唱っこサロンの日。午前は足湯を行わずにお茶っこと唱っこ(うたっこ)サロンですが、足湯をしないと聞くと帰ってしまう方も。足湯の人気の高さ、プログラム移行の難しさを痛感した一日でした。

最近仮設の談話室に問題が発生しています。談話室は予約制です。きちんと社協や各地域の生活応援センター、もしくは各仮設の自治会に話しを通して予約することではじめて使用することができます。ですから誰もが好き勝手に使える訳でもないし、突然現れた団体や個人がプログラムを行うこともできません。関係各所との信頼関係がなければプログラムを行うことはできないのです。ですが最近、見知らぬ団体や個人が、定期プログラムを行っている所に突然現れて談話室に入ってくるケースが頻出しています。場合によっては雰囲気壊されたりすることもあります。それが今問題になっています。いろんな団体や個人が仮設に関わることは大歓迎です。談話室でプログラムを持つのもいいことです。ですがきちんとルールを守らなければなりません。仮設住民をはじめ関係各所との信頼感なしではよい支援は行えないのです。

【海老原祐治兄による大斎講話】

2月26日(日) 主日礼拝の後、昼食後(おおよそ12時半ころ)、札幌キリスト教会にて、釜石支援センターの海老原祐治兄による大斎講話が行われます。支援室の報告会でもお話をいただきましたが、なかなかゆっくりと話す機会がありませんでした。この度の札幌キリスト教会での大斎講話では「震災と支援」というテーマで、釜石のことに限らず、震災に関する様々なことを伺います。興味のある方はどうぞ、札幌キリスト教会まで足をお運びください。

【第3次釜石青年ボランティア】

前回の号外でお伝えしましたとおり、第3次釜石青年ボランティアを募集しています。3月28日(水)の夜に出発し、4月2日(月)の朝に帰ってくる日程です。新高校1年生~35歳までの青年を7~8名募集しています。詳しくは2月15日発行の号外をご覧ください。

【いっしょに歩こう!プロジェクト】

「いっしょに歩こう!プロジェクト」の活動の様子は、月一度発行予定の「ニュースレター」や、「いっしょに歩こうプロジェクト!」ホームページ<http://nssk.org/walk>で、ご覧いただけます。

【支援室の活動】

インターネットで支援室ブログが見られます。毎日の釜石ベースの活動もアップされます。<http://nsskhokkaido.blog89.fc2.com> 又は、「日本聖公会北海道教区ホームページ」→「東日本大震災」→「震災支援室ブログ」の手順でご覧下さい。

【震災支援室より】

- ◎ 支援室ニュースは、各教会において掲示下さると共に、増刷して配布ください。支援室ニュースのバックナンバーは、日本聖公会北海道教区のホームページにでも見る事ができます。
- ◎ 教会や個人での取り組みについても、お知らせください。他の教会の活動の参考になります。

【連絡・問合せ先】 電話：011-561-0451、ファクス：011-736-8377
Eメールアドレス：saigai@nssk-hokkaido.jp

【釜石ベース】〒026-0031 釜石市鈴子町5-4 「聖公会 釜石被災者支援センター」
☎0193-55-4524、090-6999-7840
Eメールアドレス：nssk311@yahoo.co.jp